はしがき

野中広務さんは、出番前のメークを終えた。集まった関係者と狭いメークルームで、おしゃべりがはずんでいる。時に笑いを誘う会話が交されるものの、野中さんは口で笑っていても、目はメークルームの鏡の中の自分を見すえて、決して笑わない。まるで今日の「時事放談」の中で何を言うべきかを、最終的にチェックしているかのようだ。

そうこうしているうちに、「準備が整いました」とのディレクターの合図で、野中さんは他のゲストと共にスタジオに移動する。一、二分のわずかな移動時間の間に、野中さんと歩幅をつめて歩く関係者との、さらに手短かな言葉のやりとりが行われる。手ぶり身ぶりを交えていくつかの言葉が交されるだけなのだが、不思議なもので、それが関係者にとっては、時に千金の重みを持つのだ。

スタジオのセットの椅子は木製で大ぶりでゆったりと座れる。スツールのような尻をちょいと乗せてという安直な代物ではない。じっくりと語ってもらうためには、テーブルを含めて重厚さが必要なのだ。そこで野中さんは、いつも上座ではなくて下座に腰をおろす。これだけは絶対に譲らない。私が司会者になる以前に、ゲストで出演した折に

も、野中さんから上座をすすめられ大いに困惑をした覚えがある。世に位置取りの政治というものがあるとすれば、野中さんの人生観を貫く気配りの現れであることは確かだ。

かくて本番がスタートする。野中さんは言うべきは言う。言わずにすませることはない。メリハリの利いた発言に、司会をしていて時折ひやっとする。なぜか。野中さんの〝今〟の分析が、分る人には分る、いくつかの歴史上のアナロジーを想起させる重層的な意味を持つからだ。次に司会者として、野中さんの語りのどこに照準を合わせて質問を発したらよいのか、一瞬のうちに判断をせねばならぬ。

四十五分弱のスタジオ収録が終わると、野中さんもホッとしてか、「これは今日は言わなんだが」との前おき付きで、ポロッときわどい発言が。そしてまた関係者に囲まれて、今度は緊張感のとけた安堵感の中で、うれしそうに談笑しながらメークルームに戻る。

野中さんと私は、この五年間、何十回となくこうしたお付き合いを続けてきた。その中で、「オーラル・ヒストリー」へと誘(いざな)った。それこそメークルームでの一言二言のやりとりを通じてだ。野中さんは快諾、わがチームとの「オーラル・ヒストリー」が始まった。私は馴れ合いになることを恐れ現場には出なかったが、常に記録を見せてもらった。「時事放談」の折の野中さんの語りを思い出しながら、「オッ」とか「オヤ」とか声をあげている自分に気づく。各回ごとの印象はこれまでと異なる側面もあるのだが、腑

におちる。そして改めて政治家として、人間としての野中さんの〝大きさ〟に触れた気がするのだ。

現代史の証言者として、野中さんは常に前むきに対応された。どうか読者の皆さんには、この「オーラル・ヒストリー」の記録を読みながら、まだまだ続く「時事放談」での野中さんの味わいある語りも、また楽しんでもらいたいと願うものである。

二〇一二年五月

御厨　貴

目　次

はしがき（御厨　貴）

第一章　国政に出るまで……1
生い立ち／園部町町長に／反蜷川府政への転機／府会議員への当選と林田府政の誕生／副知事への就任／衆議院初当選

第二章　創政会の旗揚げと竹下内閣の誕生……25
二回目の当選／建設委員会と逓信委員会／自民党の部会／創政会の旗揚げ／田中派夏季研修会の思い出／田中角栄と竹下登／衆参同日選挙／中曽根裁定―竹下総裁誕生へ

第三章　竹下・宇野・海部内閣時代……59
竹下内閣の成立／建設政務次官になる／創政会から経世会に／消費税・大喪の礼・リクルート事件／宇野内閣と参議院選

挙／海部内閣とねじれ国会／金丸訪朝団／その後の北朝鮮との関係

第四章　「政界の狙撃手」……95
衆議院逓信委員長／島桂次ＮＨＫ会長を辞任に追い込む／党総務局長で選挙対策を行なう／選挙参謀の日々／東京佐川急便事件／経世会分裂への動き／「政治改革」に対する考え方／宮澤内閣から細川内閣へ

第五章　「野党・自民党」の闘い……133
一九九三年の総選挙／自民党が下野して／細川内閣で予算委員会理事になる／自民党の動き／連立与党との闘い／田中角栄の死／政治改革法案をめぐって／連立政権の綻び／京都府の自民党／細川内閣から羽田内閣へ

第六章　「自社さ」村山内閣の誕生……175
細川内閣の瓦解／連立政権誕生に向けて／村山内閣で自治大臣・国家公安委員長に就任する／連立与党の閣議／阪神・淡路大震災／自治大臣と国家公安委員長の兼任／野党側の動き

／自治省官僚との関係

第七章　「戦後五十年」と危機管理……217
——自治大臣・国家公安委員長として
河野義行さんのこと／麻原彰晃逮捕／官邸の危機管理／函館ハイジャック事件／大蔵省との関係／村山総理と戦後五十年／参議院選挙と橋本総裁誕生

第八章　橋本内閣を支えて……251
橋本総裁の印象／第一次橋本内閣の組閣に関わる／幹事長代理・選対総局長／九六年総選挙／住専問題など／沖縄との関わり

第九章　普天間問題と橋本行革……285
第二次橋本内閣の人事と普天間返還／行政改革、NTT分割／第二次橋本改造内閣の成立／大田昌秀沖縄県知事のこと／大蔵省問題／新進党の解体／橋本内閣の路線転換／「社さ」との閣外協力の解消、民主党の結党／参議院選挙で自民敗北／橋本内閣総辞職へ

第一〇章　悪魔にひれ伏してでも――小渕内閣官房長官時代……319
小渕内閣の官房長官への就任／小渕内閣の組閣／総理と官房長官の関係／九州・沖縄サミット／小沢自由党との連立／官房長官を退任する／公明党との連立／自自公連立

第一一章　小渕首相、倒れる……355
自自公連立補足／内閣改造／幹事長代理としての選挙対策／幹事長代理、幹事長と総務局長／政治家同士の関係／省庁再編と金融不安のなかで／自自連立解消へ／小渕総理、倒れる

第一二章　神の国発言・加藤の乱・えひめ丸事故……397
――森内閣の退陣まで
森内閣の発足から解散・総選挙まで／竹下登、死去／第二次森内閣／加藤の乱／幹事長を退任する／えひめ丸の事故／KSD事件と参議院の勢力／ポスト森の総裁選と橋本派

第一三章　小泉内閣時代と政界引退……439
二〇〇一年の自民党総裁選／田中真紀子外相をめぐって／二〇〇三年の自民党総裁選／小泉純一郎と北朝鮮問題／小泉内

閣の組閣と政策／公務員制度改革／中国訪問／ハンセン病国家賠償訴訟／飯島秘書官、鈴木宗男氏について／政界引退／これまでの人生をふり返って

後　記……（野中広務）……483

オーラル・ヒストリーを終えて……（牧原　出）……485

解説「人間の弱さ」に敏感な政治家……（中島岳志）……489

野中広務略年譜

第一章
国政に出るまで

園部町長時代

生い立ち

野中　八十年に及ぶ自分の人生をふり返ってみると、私は恵まれた家庭環境ではなく、むしろ逆の生まれの中から、親の愛情によって育てられたと思います。当時数少ない公立幼稚園に入れてもらいました。また旧制中学校も、大変な狭き門でしたが、入学することが出来ました。だからといって私は、ずば抜けて賢かったというわけでもなく、むしろ平均点がとれておったかな、というぐらいの存在でした。

特徴的なのは、小学校から剣道を始め、中学に入っても剣道をずっとやって、卒業のときに二段、卒業してから大阪に行って四段を取ったことです。そこで段を取るのをやめましたが、それが一つの支えになっていました。それから山が好きで、夏山にも冬山にも行きました。それで、国鉄に入れば汽車賃がただだから、というせこい考えで国鉄を受けて、これもまた自分の学校から一人だけ入れました。そして大阪鉄道局の本局に入って、業務部で仕えた時の局長が、のちの内閣総理大臣佐藤栄作先生でした。

佐藤さんには、私が講義をしたほうです。私はずっと乗車券の様式を担当しておって、決裁をとろうと思えば、まず大阪駅、京都駅、神戸駅、天王寺駅の出札の助役のところ

に行って、「今度こういう様式の乗車券をつくろうと思うんだけれど、どう思う？　賛成してくれるか」と言って現場をこなさなければならない。そこで了解を取って、その上で局に帰ってきて、自分の関係する部局の決裁をもらっていく。三十五、六カ所の決裁を取らなければならない。

その最後が佐藤栄作さんで、緊張して局長室に入って、決裁書を見せましたら、よく見てくれて、最後に決裁の判を捺してくれました。決裁書をよく見ると、「佐藤」という判は大きな判でしたが、逆さまを向いている。「局長、この決裁はお気に召しませんか」と聞きました。心臓が強かったんですな。「なんだ、捺しただろう」と言うので、「はい、いただきましたけれども、私の上司で、気に入ったときは青鉛筆で、気に入らんときだけ赤鉛筆でサインした上司がありました。局長の決裁をいただきましたけれども、ご印が反対を向いていますので、お気に召さないのかな、と思いまして」と言ったら、「なにっ、返してみろ」と言うので返したら、「うん、そうだな」と言って自分でペケをして、真っ直ぐに「佐藤」というのを捺して、「これでいいか」と言う。「ああ、ありがとうございます」と言って帰ってきました。

四日ほどしたら、課長が「おい、お前は局長に判の捺し方を教えたそうだな」と言うので、「いやいや、違います。「お気に召しませんか」と言っただけです」と言ったら、「いや、「お前のところにおる男、野中というのが、俺の判の捺し方に注文を付けたけれ

ども、あれはきちんと言うてくれた。やっぱり受ける苦労をしておる連中の誠意に応えられるように、判の捺し方は真っ直ぐでなければいかんと思った」、そういうことを部長会議で言われた」という話で、当時の逸話として残ったんですね。

戦後すぐで、男の人はまだ戦地から帰ってこないときでした。大阪の隣の吹田市に、新しく入った人が教育を受ける、あるいは中間職が教育を受ける鉄道教習所がありました。係長が「お前、吹田の教習所に行って、旅客帳票の講義をしてこい」と言うんです。「係長、無理ですよ。僕自身が実務をしていないのに」と言ったら、「実務をしていないやつがこういうところで仕事をしているから教えられるんだ。教えてこい。ほかに誰がおるんだ」と言われて、前日に徹夜で原稿をつくって行きました。

教室を開けたら、中には男が一人もおらんで、僕と年齢の変わらない女の子ばかりがおるんです。駅員、車掌、出札係、改札係、全部女の子ばかり。教壇に立って、ノートを広げたときに顔が真っ赤になって、あがってしまった。まだ純情な男でしたからね。あがってしまって、ノートの字が見えない。そうしたら座っている女の子がクスクス笑い出す。余計あがってしまって、一時間、何をしゃべったかわかりません。ほうほうの体で一時間を過ごしました。もう俺はこれから生涯、絶対に原稿は持たない、これからは相手の反応によってしゃべれる、あるいは語れるようになろうと誓って、それからは原稿を持たないようにしました。だから、私はどこの講演に行っても、お葬式も含めて、

口頭でしゃべるんです。そのほうが聞いている人には胸に伝わると言われるようになりました。のちにその係長に会いましたときに、「私が政治の場で少しでもポストに就けるようになったのは、「教習所に行って教えてこい」とあなたに言われたあの一言のおかげです」と言って、今も私は感謝しています。

園部町町長に

翌年（一九五一年）、統一地方選挙が行なわれました。町の政治はずいぶん混乱していて、籍を置いていた青年団の諸君から、「やっぱり君も少し腰を落ち着けてやれよ」と言われておりましたから、「君らがそう言うのなら、俺は鉄道局を辞めて、町の政治を正しい方向にしていくために町会議員の選挙に出るよ」と言って、親にも兄弟にも言わずに鉄道局を辞めて園部町の町議会議員選挙に出たのです。おふくろなんかは、「あんないいところを辞めて、何をすんの、あんたは」と言って、泣いて諫めましたが、私は当選し、それから三回当選しました。非常に荒れた町でありましたが、私は監査委員、副議長をやりました。三期目に町合併のために、途中で新しい町になって、そこで副議長、議長をやらせてもらいました。

特定郵便局長をやっていた人が町長をやられていて、七十三歳でしたが、一年半で病

気で倒れてしまいました。次に出たのが、私が副議長のときに議長をしておる人でしたが、この人も七十四歳で、一年三カ月で倒れてしまいました。そこで議会の皆さんが、「もうしょうがないよ、年寄りばかりやって、任期の半ばも行かないで倒れてしまうんだから、若いお前がやれ」ということになって、三十三歳の時(一九五八年)に、町長選挙に臨むことになりました。

京都は昭和二十五(一九五〇)年から蜷川府政で、革新自治体の先導的なところでしたから、町長選に出るのは、私一人ではとても済まないだろうと思っていたら、私の町で半年前に退任するまで中学校長をやっておった人が、社会党の推薦で対立候補として出ました。しかし私が議員を八年やっておって、議長もやっておった関係だと思うんですが、蜷川虎三さんは相手のほうの応援には来ませんでした。蜷川さんとはのちに対決することになりますが、それが私の政治的なスタートであっただけに、どこかに心の通ったところがありました。私が蜷川府政と正面から対決するような状態になったのは、町長時代の後半でありまして、初めは、ユニークで、他の府県では見られない府政をやる人だと思って、むしろ親近感を抱いていました。

町長一期目の終わり頃は、国民年金、国民健康保険をスタートさせる時代で、日本が大きく変わっていく時代でありました。東京に来て、町村長に「ＩＬＯ八七号条約の倉石修正案は……」と言ったら、「ＩＬＯ八七号条約というのはどこの貿易条約だい？」

と言われるぐらい、非常に認識が遅れていた時代でした。私が説明すると、「それじゃあ特別委員会をつくって、お前は委員長をやれ」と言われて、結局、二期目の初めから、私は京都の町村会長と、全国町村長会の副会長をすることになりました。

私の八十年の人生は、運命であり、根性であり、自分なりの努力であったと思います。運命というのは、自分が予期せざるときに突然チャンスがやって来て、自分の人生の進路が決まっていく。そうでなかったら、よく行っても私は京都駅長にもなっていないと思います。せいぜい中間駅の駅長で終わっていたであろう私が、中央政治にも関与するような状態になったのは、偶然の結果ばかりでした。人が病気で倒れた、それで町長になる。時代の変化が激しいときだったから、京都の町村会長になる。蜷川府政の下で革新が強いから、京都の町村会長は、組合交渉で年寄りはみんなやられてしまうんです。そしてボーナスのほかにプラス・アルファを要求されて、みんな取られてしまい、病気で倒れて死んでしまう町長さえいました。そういう状態で、「あんたみたいに若い人が町村会長をやって、町村の組合を一束にして交渉してくれ。われわれは、彼らと理論的にやっていけないし、体力的にもやれない」と言われたわけです。私は大阪鉄道局で、労働組合を若干知っておりましたので、私が町村会の労働交渉を一手に引き受けてやってきたということです。

反蜷川府政への転機

蜷川さんは非常に上手な人で、革新知事ではありましたが、金を中央から取らなければならないところ、あるいは仕事を中央から取らなければならないところでは、部長や課長を全部中央政府からもらっていました。特に総務部長は自治省からもらい、財政課長、地方課長も自治省からもらい、土木部長は建設省から、農林関係は農林省から、という具合に、要所要所で中央の人事を使うということに、長けた人でした。

そういうところは蜷川府政の立派なところですが、しかし私は蜷川府政一色にならなければ駄目なんだという風潮に非常に抵抗を感じておりました。保守系の町村長が出ると、自治省出身の山田総務部長が必ず町村長たちに、「蜷川府政に忠誠を誓います」という一札（いっさつ）を書かせるんです。それでその町村に補助金をつけたり、仕事をやる。私が町長のときに、自治省から来た岡田という総務部長が、京都府の財政を助けるために自動車取得税という地方単独税を創設しました。いまではそれが全国に普及していますが、当時自動車取得税をやっていたのは京都だけでした。これは中央官僚がおったからだと思います。これを一回やって、二年経って、二回目のときに議会で満場一致で通り、自治省に申請したけれど、ときの永山忠則さんという広島から出ている自治大臣が、「知

事選挙の前にこんな決裁をしたら、蜷川の得点になるだけではないか。知事選挙が済んでから決裁しよう」ということになった。

しかし選挙が済んだら四月になってしまう。税の賦課は四月一日にやらなければならないので、みんなが困った。のちに岡山県知事になる長野士郎さんが自治省の税務局長をやっているときで、私が総務部長に頼まれて、東京に行きました。

新幹線のホームで自民党の府会議員から「どこに行くんだい」と言われたから、「いや東京に行くんだよ」と言った。東京に着いてしばらくしたら、京都の町村会の事務局長が電話をかけてきて、「えらいことです」と言う。「なんだ？」と言ったら、「『京都新聞』の今日の夕刊に「野中京都府町村会長、知事選に洞ケ峠（ほらがとうげ）を決め込む。これは野中氏と親しい地域婦人会にも影響を及ぼす」という記事が一面トップに書かれている。大騒ぎになっております」という話でした。

京都新聞の社長は当時創業者の白石古京という人でした。白石古京さんが、「いまの京都府政を見ておったら、とても他の府県並みにはなれない。社の命運を賭けて今回の知事選挙は蜷川打倒で行く」と、蜷川打倒の大キャンペーンを張っている最中に、私の東京行きが引っかかってしまったわけです。

私が「自治大臣に会う」と言ったら、調整してくれて、翌日赤坂プリンスの小さな畳の間で八時から食事をすることにしました。晩の十一時頃、京都の稲田達夫という秘書

課長から電話が入りまして、「知事が『京都新聞』の記事を読んで心配しております。明日自治大臣とお会いになったら、そのまま帰っていただけませんか。赤プリの前に京都府の車を待たせておきますから、それで羽田まで走り、飛行機で伊丹に行き、伊丹でまた京都府の車を待たせておきますから、それに乗って亀岡まで帰ってください、亀岡で蜷川知事が街宣車に乗って、町長のお帰りを待っております。そこで知事と同じ車に乗って、洞ヶ峠を決め込んだのではないという身の証を立ててください」と言ったんです。「君の言うことはそれだけか」と言ったら、「そうです、お願いします」と言う。私は、「帰らない」と言って断わりました。

いままでいろいろな町村長が誓約書を取られたとかいう話を耳にしながら、私は心ならずもそれを見逃してきた。初めて自分に火の粉がかかってきた。「身の証を立てろ」と役人に言われて、そのまま帰ったら、選挙については無難に終わるであろう。けれども俺は、いやしくも一万六〇〇〇町民の投票によって選ばれた町長なんだ。公選で選ばれた者が、一役人の恫喝に屈して、飛んで帰ったら、これから公選で選ばれる者の歴史に俺自身が汚点をつけることになる。明日帰って、町村会長を辞任する手続きを取るといって、役員会をにわかに開かせました。

役員にその事情を言い、「町村会長を辞めさせてくれ、全国の副会長も辞める」と言ったんですが、「まあ、もうあと一週間残っているだけだ。選挙の間だけこのままにし